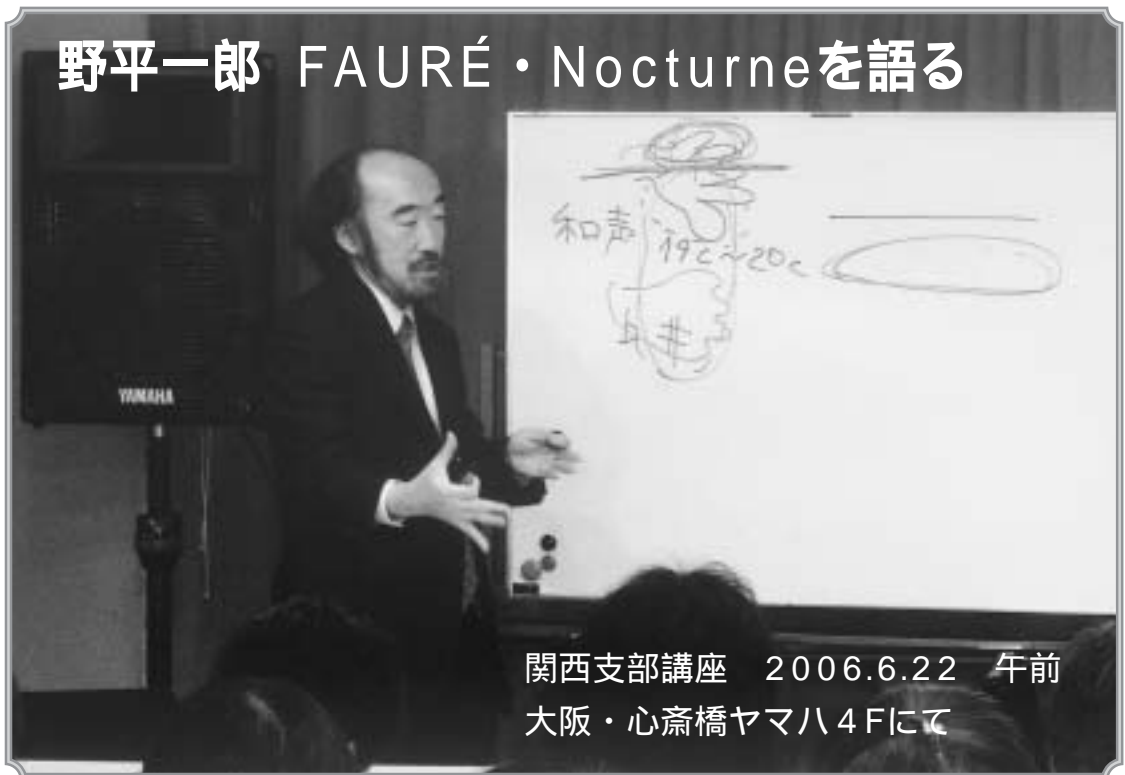


## 野平一郎 FAURÉ・Nocturneを語る



関西支部講座 2006.6.22 午前  
大阪・心斎橋ヤマハ4Fにて

今日はフォーレのノクターンについてお話しすることになりました。僕はこのような講座の時、あまり精神論的なお話しはしないのですが、フォーレの音楽を弾くためには、それを愛してほしいし、好きであってほしいと思っています。あたり前のことも知れないけれど特にそのことは強調したいのと、もうひとつは是非ハーモニーのことを考えて弾いてほしい。その理解が足りないと音楽が成り立たない最も極端な例ではないかと思っています。

フォーレ自身長生きした人なのですが、全部で13曲のノクターンは1875年頃から1921年にわたって書かれており、特にその時代は色々な作曲技法があって激動期だったのです。つまり音楽語法がロマン派の時代から近代へと大きく移り変わった時期です。

フォーレは閉じこもり型の作曲家で、世の中の動きとは全く無縁に作曲した人だという論調が見られるのですが、それは正しくない。むしろ反対に世の中のことに敏感だったと思います。さっきハーモニーと一言でいいましたが、19世紀末から20世紀初頭にかけてのハーモニーの発展の動きについて、ある程度の知識がないと弾けません。単にどこが倚音でどこが終止であるかというような最も基本的なことから、様々なニュアンスや音色を作るための分析と同時に背景となる全体的な音楽史の流れも踏まえないと理解が難しい音楽だと思います。

実は朝っぱらからノクターンを語るのには矛盾しているのですが（笑）夜の音楽の概念は現実と仮想の狭間、接点、現実の生活から別のところにあるというか、人間の普通ではない状態を表現している場合が多いです。ですから夜の音楽のキーワードは“ 仮想・夢 ”の世界でしょう。実際にマーラー、シェーンベルク、バルトーク等の作曲家がすばらしい作品を残しています。

フォーレという人は実は内向的な人だと思われる。実際弾いていてもあるところまで *cresc.* するのだけれど、すぐに *dim.* してしまう。次第に高まって次に下りて来るときに、ものすごく早く下りなければならないとか、クライマックスが作りにくいとかいうことがありますね。それが象徴しているようにフォーレの音楽はある一線を越えないと思われる。また、温かな人物であったともいわれている。ところが、1900年代になってからパリのコンセルヴァトワールのディレクターになるんですね。院長になったんです。そこでは皆が驚いたことに温かな先生が次から次に院長の権限で教授の首を切っちゃった。当時のコンセルヴァトワールが伝統的なことばかりやっていたので、それを刷新したいと思ったのでしょうか。そんな情熱が彼にあるとは知らなかったのです。彼の音楽を見ても内に秘められた情熱を大変深く感じます。

では、第1番から進めますが…。

<野平先生、ピアノの前へ行って次から次へ例題となる曲を弾かれる。そしてこの後は演奏されながらの講義となった。実際の音としてその響きをお伝えできないのが残念。（編者）>

## 第1番

Gabriel Fauré, Op. 33, N<sup>o</sup> 1.

Piano.

*cantabile espressivo*

♩ = 52 Lento.

pp sempre

A B

4


*simil.*

数字は小節番号

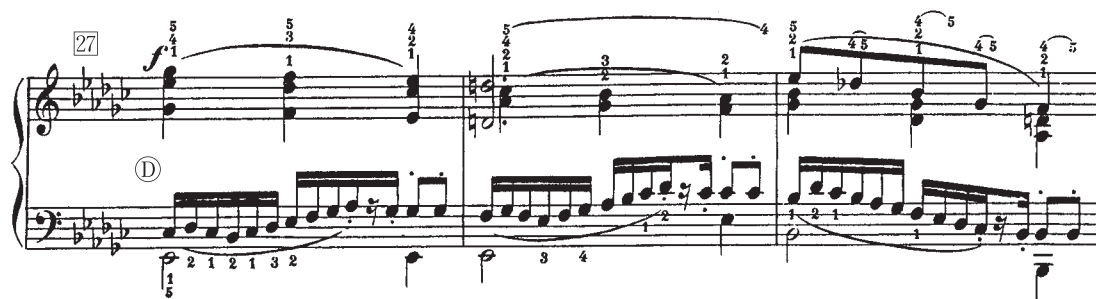
① 1番はフラット6ツ (es-moll) です。

ノクターン全体を見ても や の数の多い調子が多く見られます。これはショパンの場合も同じことですが調号の数の少ないものと多いものでは明らかに音色の違いがあります。ノクターンを表現するのに作曲家は数の多い調子を求めたとみるべきでしょう。

② メロディーがずい分高音で鳴っていて、下に和音の刻みがついています。この伴奏は夜を表わすというか、背景です。よく見ますとメロディーは3拍子なのに伴奏部分は2拍子なんです。つまり内声に2拍子が隠された状態になり音楽が多層になるのです。特に第1小節から第2小節への受け渡しがとてもやわらかなものになります。再現部(94小節から)を見るともっとはっきり分るでしょう。

③ ここは第2の部分ですが、柔軟な3拍子を考えてください。低音はずっと  という基本的リズムで流れを作っていますが、これは機械的な3拍子ではなくもっと柔らかな生理的なリズム。水の流れのような淀みのない動きです。“水”というのもフォーレのひとつのキーワードで弦のボーイングを想像してみてもはどうでしょう。いつも流れを失わないでください。右の6連音に気を取られると左の3拍子がおろそかになります。

また、21・22小節はフランス音楽でよくあることなのですが一種の舞台装置のようなもので、背景を表わしながら雰囲気作りをします。それは23小節からのメロディー(主役)登場のための2小節なのです。



① 難問があります。皆さんはペダルをどう考えますか。一般的な考えでは半音進行では絶対にペダルをかけないのが原則なのですがフォーレぐらいになるとペダルをonかoffにするだけでは成り立ちません。ハーモニーも複雑だしそれをつなぐ経過音もいっぱいあるわけで、耳で聴いて判断する意外ありません。ハーフペダルや1/4ペダルもありますが、要は半音階のとき、響きが濁らないように。ふみ替えの悪さのために汚い響きにならないこと。これは全体にいえることです。



80

di - mi - nu - en - do

⑤

4 simile

83

⑥ p

p

f

marcato

⑤ 曲のクライマックスですが80～84小節各々の第1拍目の和音は“固有7の和音”です。85小節には、また別の“7の和音”が置かれています。これらはとても大切な和音で、この時代の作曲家たちは“7の和音”や“9の和音”を一番思いを込めている所に使いました。一番大事な瞬間なのです。とてもドラマチックだと思います。

⑥ 83小節と84小節はオクターブ違いで同じ型です。このオクターブの違いは決して同じ弾き方をしないでください。音域がオクターブ違うというのは、音色的に全く異なるわけで無頓着にならないように。この例は第2番の最後、86・87小節にも当てはまります。

<残念ながら紙面の都合で以下を省略致しますが、最後に先生は・・・(編者)>

ノクターンの6番以降、特に7、8、9番などはすばらしいので是非弾いてください。そして13番に至る後期最晩年のフォーレの音楽も知ってほしいと思います。

(構成・編集 広報部 梅本俊和)

